

中学校国語科書写の 大きな飛躍を

山梨大学教授 宮澤 正明

国語科書写は、小・中学校の九年間を通して、一人ひとりの書写力の向上を目ざしています。書写力は技能を中心とすることから、反復練習や積み重ねの学習に負うところが大きいと言えますが、特に、小学校における点画の筆使い、字形の整え方などの基礎・基本は、それぞれの知識とともに実技を通して繰り返し学ぶことで習得が可能となります。中学校では、速書きとしての行書を中心に学習しますが、これもまた実技による反復練習によってその技能を習得せざるを得ません。

しかし、中学校国語科書写は授業時数に制約があり、十分に反復練習をするだけの時間が保証されていないと言いつても、行書に關しては、ほんのさわり程度の学習で終わっているのが実情ではないかと思われまふ。

加えて、中学校生活では、他教科の学習内容の増加、部活動への参加、進学や進路のことなどによって生徒の興味・関心の対象が拡大・増加するときであり、小学校から引き続き行われる書写学習への関心や期待感が薄れていくのはやむを得ないと

ころです。

とはいえ、義務教育の結実である中学校期は、生徒にとって、文字を書く活動が急速に増し、また、自我の形成・確立とともに、他者の書き文字と比較して、自分の書き文字にコンプレックスを抱き始める時期でもあります。社会人になったとき、自信をもって文字を書けるといふことは、とても有益なことです。自分の書き文字に自信をもち、積極的に文字を書く活動ができる力を身につける大切な時期にあたるともいえまふ。また、高校や社会に巣立つ前のこの時期に、日常生活における必要最低限のさまざまな書式や形式についての知識や技能を身につけておく必要があります。これらの点に關しては、指導者も生徒も強く認識してほしいところではなす。

そこで、中学校国語科書写をより興味深く学習し、自分の文字に自信をつけるための工夫を紹介しまふ。これは、49号(第16回)でも紹介した工夫ですが、だれでも自分の名前に關して抱いている思い入れが、学習の動機づけになると考えまふ。字源までたどると漢字学習とリンクすることにもなります。

○自分の名前を、楷書と行書の両方で、自信をもって書けるようにする。

それぞれの文字に使われている点画の名称と筆使い、字形の要素は何か、小学校で学んだことを想起させ、徹底的に分析する。また、行書の特徴を活かしたとき、どのような書き方ができるかを数種類試みて、サイン風に仕立ててみる。

例 山本明子

・楷書の分析

「山」縦画・折れ、画の長短・方向・接し方・画間
 「本」横画・縦画・左右の払い、交わり方・接し方
 「明」横画・縦画(はね)折れ、方向・画間、左右の組み立て方
 「子」折れ・反り・横画、接し方・交わり方

山本明子 山本明子
 山本明子

・行書の特徴によるサインの試み

また、作品化することで目標が明確になり、学習を意欲的にします。書写の学習は、いわゆる手本の文字による清書が目標となりがちですが、時に単元と単元との合間に、次のようなスペシャルメニューがあつてもよいのではないのでしょうか。

○好きな言葉・文・歌詞などを、自分の好きな筆記具や用材を使って書く。

書写の学習は、与えられた文字や言葉を書くことが多く、常に受け身の学習に陥りやすい。基礎・基本を習得する際は共

通の課題になるのはやむを得ないが、時に、自己主張の場として思い切った方法をとることも必要である。それには、生徒自身が選んだ文字・言葉・文がよく、筆記具や用材も生徒が工夫すると関心度が高まるであろう。できた作品は掲示・展示し、一人ひとりのアイデアや努力をたたえ合ふ。個々の工夫だけに相対化しにくいいため、自信をつけやすい。ただし、遊びになつては元も子もないので、作品化する前に、既習内容を踏まえた練習を重ねることは言うまでもない。

文字を審美の対象として芸術的に表現したり、鑑賞したりするための学習は、高等学校芸術科「書道」の学習であり、義務教育では行われていません。しかし、文字を書くという行為だけでなく、書かれた文字を実用の具として見つめ、さらに日本古来の伝統文化としてとらえる視点も、この時期に芽生えさせたいところです。その意味で、文字・言葉選びから始めるこの試みは、たとえその出来映えは拙くとも、だれの真似でもなく、まさに「自」の書き文字と主体的に対話する営みにほかなりません。このような機会こそが文字文化と遭遇するチャンスであり、芸術科「書道」への関心や理解につながるのだと考えまふ。

中学校での書写の学習が日常に生き、やがては芸術科「書道」への道標になるような、発展性のある興味深いものになるよう、関係者一同、生徒とともに考え、実践してみようではありませんか。